

A C E REVIEW

the Activity Center for English

2022



英語教育センター

(Activity Center for English)

2022 Volume 4

ISSN 2434-8406

ACE COMMITTEE MEMBERS 2022

センター長

小山 敏子 (教育学部)

Toshiko Koyama (Faculty of Education)

文学部

四重田 陽美

(Faculty of Literature)

Harumi Yoeda

教育学部

鈴木 幸平

ベー・シュウキー

(Faculty of Education)

Kohei Suzuki

Siewkee Beh

人間社会学部

グローガン・マイルズ

池田 香代

(Faculty of Human & Social Sciences)

Myles Grogan

Kayo Ikeda

薬学部

森本 正太郎

(Faculty of Pharmacy)

Shotaro Morimoto

英語教育センター

荒川 亜希

有田 恵子

(Activity Center for English)

Aki Arakawa

Keiko Arita

1. 共通教育科目のカリキュラム改革をうけて

小山 敏子

ACE では、2016 年度のセンター設置準備室時代から、本学の共通教育やキャリア科目に配当されている英語科目のカリキュラム改革を本学教務委員会と連携しながら行ってきた。2018 年度から導入を始めた習熟度テスト（Placement test や Achievement test）の実施やそのデータを基にした共通の教育外国語科目（英語）の習熟度別のクラス編成作業に加え、これら全学対象の科目と教育学部、人間社会学部に設定されている英語専門科目とを併せての時間割策定や抽選作業など、英語科目に関する多くの教務関連業務を現在も担っている。『ACE Review 2021』では、共通教育外国語科目群の「英語 IA/IB（コミュニケーション）」「英語 IIA/IIB」について、文部科学省から出された指針や本学教務委員会の方針に則り、シラバスの「講義概要」「到達目標」や「評価基準」など、統一した経緯や現状を報告した。

本学の現行カリキュラムでは、共通教育外国語科目群における「英語」は、薬学部を除いて必修科目の扱いではないものの、履修者数が最も多い言語である。本学の英語専任教員数が年々減少している状況下であって、現在、「英語 IA/IB（コミュニケーション）」「英語 IIA/IIB」の両科目は、多くの非常勤講師の先生方に担当いただいている。近年の状況として、2020 年から始まったコロナ禍による学生の変化もあり、担当されている先生方から、ACE 事務室や ACE 運営委員、あるいは教務課を通して、学生の英語習熟度や受講態度、また成績評価などについてのご意見をいただくことも多くなってきた。

実際、2024 年度から本学の共通教育カリキュラム改定が実施されることが決まっている。特に外国語科目群においては、教職課程を持つ学部学科の教員免許取得希望者は、一年次における外国語は「英語」を履修することが必須となる。加えて、外国語科目の卒業に必要な単位数は、文学部、教育学部、人間社会学部において、現在よりも軽減化される。つまり次年度のカリキュラム改定が、今後の英語科目における履修者数や履修状況にも変化を与えることは必至と考えられる。

ACE ではこのことを一つの契機と捉え、2023 年度には共通教育外国語科目「英語」の在り方のさらなる改善を行っていきたいと考えた。そこで、2022 年度に英語科目を担当いただいている教員（専任、非常勤）から、ACE が主体で行っている業務（シラバス共通項目、テキストバンク、習熟度別クラス編成や成績評価など）について意見を募ることにした。

1. アンケート調査と結果

アンケートは MS Forms に設定し、2022 年度の後期授業終了後（2023 年 1 月）に担当

教員に向けて配信した。各質問項目について、「十分でないと感じた」や「適切でないと感じた」と回答された場合は、加えるべき要件なども記述してもらった。また、授業運営全般においての気づきや困っておられることについて自由記述ができる欄も設けた。

先述した通り「英語 IA/IB (コミュニケーション)」「英語 IIA/IIB」は、一人の教員に複数のコマを担当いただいていることが多い。担当クラスによって、学部学科や学年が異なり、また習熟度も異なるため、このアンケートでは、担当クラスごとに回答してもらうこととした。なお、2022 年度の開講数は「英語 IA/IB (コミュニケーション)」が 25 コマ (うち、再履修クラスが 3 コマ)、「英語 IIA/IIB」は 26 コマ (うち、再履修クラスが 6 コマ) であった。

表 1 にアンケートの質問項目の結果を割合 (%) で示している。担当クラス数が教員によって異なることから、あえてグラフ化はしていない。再履修クラスの回答数については、所属学科や学年に関係なく履修できることや習熟度別のクラス分けは行っていないことに加え、留年制度がある薬学科については履修方法が異なることなどから、表内の数値には含めていない。なお、「英語 IA/IB(コミュニケーション)」クラスの回答率は 90%、「英語 IIA/IIB」クラスの回答率は 85%、各再履修クラスについては 100%であった。

表 1. 質問項目と結果

質問項目	英語IA/IB	英語IIA/IIB
1. ACEで選定しているテキストバンク (テキストの種類) について		
当該科目のテキスト群としては適切であると感じる。	80.0%	82.4%
当該科目のテキスト群としては十分でないと感じる。	20.0%	17.6%
2. ご自身が使用されているテキストを実際に授業で使ってみて		
授業目標を達成するのに適切であったと感じた。	70.0%	81.3%
授業目標を達成するのに十分ではなかったと感じた。	30.0%	18.8%
3. 現行の「標準クラス」「基礎クラス」のクラス編成について		
ご担当の学科の学生の学習環境には適切であると感じる。	90.0%	70.6%
ご担当の学科の学生の学習環境には適切でないと感じる。	10.0%	29.4%
4. 現行の習熟度別「評価基準 (秀・優の割合など)」について		
ご担当の成績評価には適切であると感じる。	65.0%	64.7%
ご担当の成績評価には適切ではないと感じる。	35.0%	35.3%

まず項目 1 について、ACE が主体となって「英語 IA/IB (コミュニケーション)」「英語 IIA/IIB」の授業の「講義概要」や「到達目標」を設定していることから、授業目標を達成するために適切だと考えられるテキストを ACE で予め複数選定し、担当教員はそのテキストバンクから選ぶという仕組みをとっている。これらのテキストは、これまでも年度が替わる時期に入れ替えも行っている。また、項目 2 では、実際に選定されたテキストの授業での使用感を尋ねた。

今回の回答結果から、両科目においてテキストバンクの選定内容は、概ね問題がないと考えられるが、担当教員からは「基礎的な英語四技能の力を体系的に扱っているテキストが必要」や「各学科の専門性に合ったテキスト選定を」などの提案に加え、「テキストで扱っている専門的な内容についての説明が不足していた」「英文法の説明が不十分と感じられた」「(テキスト付属の)教授資料の説明が不十分であった」といった具体的な意見もあった。

次に、項目3は習熟度別クラス編成についてである。ここではクラス編成が担当学生の学習環境として適切であったかどうかについて尋ねた。ACEでは、英語科目のクラス編成として「標準クラス」と「基礎クラス」を設定しているが、習熟度テストの結果に基づいているため、学部によって設置クラス数は異なっている。

この項目への回答結果については、表1から明らかのように「英語 IA/IB (コミュニケーション)」と「英語 IIA/IIB」とで差がみられた。ACEでは、2回生の英語クラス編成も1回生同様、習熟度テストのデータを用いているが、2回生になると各学科で専門科目の履修が始まるため、英語が専門でない学生の英語学習に対する動機づけが弱まり、そのことが授業運営に影響を与えていることも考えられる。実際、担当教員からも、学科によって「学生間の学力差が大きく開いてしまっている」「標準クラスなのに、英語力にバラツキがある」などの意見があった。

項目4は、「英語 IA/IB (コミュニケーション)」と「英語 IIA/IIB」の「評価基準」についてである。習熟度テストによるクラス分けを行っているため、平等性の観点から学生が所属する英語クラスによって成績の差異があってはならない。そのため、ACEでは「標準クラス」と「基礎クラス」それぞれで「秀・優」の割合を設定し、担当教員にはその範囲内の成績評価を依頼している。

回答結果から、両科目とも3割以上のクラス担当者が、この評価基準の割合は「適切ではない」と考えていることがわかった。具体的には「秀・優の割合を決定することがむずかしい」や「秀・優の割合がやや多い」という意見があった。また、「秀と優の割合を分けて評価すべき」や「平常点を多く獲得した学生が多数いる場合は、割合を気にせず評価してやりたい」などという提案もあった。

最後に、「授業運営全般における気づきや困っておられること」について、再履修クラスを担当されている教員分と併せて、主な記述を図1にまとめた。

図1. 授業運営全般について

- 難聴の学生がいたので、リスニング中心のテキストは扱いが難しかった。テキストについては、配慮が必要だった。
- 教科書を先輩からもらった学生がいて、問題の解答を知っていたらしい。
- ペアワークやグループワークを取り入れた活動を行う予定でしたが、取り組み方に差があり難しかったため個人ワークで進めました。
- 授業に来ない学生が複数名います。メールで連絡をとってみた方がいいのか、そっとしておく方がいいのか、対応に悩んでいます。

2. 今後に向けて

2018年度に設定した英語習熟度別クラス編成や成績評価基準などは、その施行から5年を経て見直す時期がきていると考えていたが、その必要性が今回のアンケート結果から裏付けられたといえよう。

次年度は今回の結果やいただいた意見を参考にしながら、テキストバンクに含めるテキストの種類や各学部における現行の習熟度別クラス編成について見直しを行っていく予定である。また、成績評価基準の割合についても、現状に即したより適切なものとしていきたい。加えて、授業に出席しない学生や合理的配慮が必要な学生への対応については、これまで以上にアクセスルームや教務課、そして、当該学生の所属学科の教員と連携をとりながら、ACEができる支援を行っていきたいと考えている。

II. 英語習熟度測定テスト

荒川 亜希

英語習熟度を測るテストは2018年度から英語運用能力評価協会(ELPA)を利用してきた。現在、ほとんど大学ではこの種のテストをオンラインで受験させているが、本学では、学生全員が同じ環境で受験できるよう導入当時から対面での実施を続け、2022年度で5年目となる。

この習熟度テスト実施は、学生が「自身の英語力を知る」ことを最大の目的としているが、他大学同様、このテストのスコアを共通教育英語の習熟度別クラス編成に使用している。つまり、入学時に実施するテスト(プレースメントテスト)のデータは英語IA/IBのクラス分けに使用し、また、1回生終了時に実施するテスト(アチーブメントテスト)のスコアで英語IIA/IIBのクラス編成を行っている。

1. 2022年度の実施状況

プレースメントテストは例年通り、入学式の翌日、2022年4月4日(月)に実施した。準備に際しては教務課スタッフと各学科の共同研究室スタッフの協力の下、従来通りの手順で行った。2020年度以降、コロナウイルス感染拡大防止を考慮に入れて学生同士の「密」を避けるため、午前、午後に分けて、それぞれ2学部ずつ実施した。実施時は、座席の配置はもちろんのこと、手指消毒や教室の換気の徹底などの感染対策にも努めた。

試験当日はACE運営委員が監督責任者を務め、各学科の教職員が監督補助ならびに配布回収補助に携わり、新入生520名のうち、503名(96.7%)が受験した(表1)。このテスト結果をもとに、英語IA/IBクラスの習熟度別クラス編成を行った。

アチーブメントテストも例年通り、後期16週目にあたる1月25日(水)に対面での実施で準備を進めた。入学直後に行い履修登録締め切りまでに余裕がないプレースメントテストとは異なり、アチーブメントテストは当日欠席者への配慮として、本試験の1週間後に追試験日を設定している。これまで、本試験に受験できなかった学生の3割程度(30名~40名)が追試験を受験してきた。しかし、2022年度は本試験当日に記録的な寒さとなり、大雪の影響で交通機関が麻痺するなど、多数の学生が登学を断念せざるを得ない状況となった。そのため、追試験の情報を学内ポータルで配信する回数を増やすなど、追試験の周知に努めた。また、例年以上に追試験者が増えることを想定し、試験手順を見直したうえで、追試験に臨んだ。その結果、追試験受験者も含めて、1回生518名中431名(83.2%)が受験した。(表2)。このテスト結果をもとに、2023年度の英語IIA/IIBクラスの習熟度別クラス編成を行う。

配慮を必要とする学生については、本学の学生課が入学予定者に対して「大学生生活支援カード」を配布、そこに記載された情報をもとに、アクセスルームの学生支援コーディネーターが個々の学生の状況を確認し本人からの要望を聴取している。年々、配慮を必要とする学生が増えていることから、実施前の学生支援コーディネーターとの打合わせは欠かせない。打合わせを踏まえて、座席の配慮や口達等の画面（紙面）提示、また別室受験などの対応を行っている。

特に聴覚障害を持つ学生への対応は、アクセスルームの学生支援コーディネーターと専門知識を持つ教育学部教員の補助を得て試験実施が可能となっている。2022年度も教育学部2名、日本語日本文学科1名、歴史文化学科1名、薬学科1名の学生に対し、適切な対応ができた。

表1. 2022年度プレイスメントテストの受験状況

2022/04/04実施			
学部・学科 在籍者数	受験者数 (名)	欠席者数 (名)	受験率 (%)
日本語日本文学科 56名	53	3	94.6%
歴史文化学科 52名	49	3	94.2%
教育学部 140名	134	6	95.7%
－幼児教育専攻 52名	49	3	94.2%
－学校教育専攻 58名	56	2	96.6%
－特別支援教育専攻 30名	29	1	96.7%
人間社会学科 57名	56	1	98.2%
スポーツ健康学科 96名	94	2	97.9%
薬学部 [※] 119名	117	2	98.3%
合計 520名	503	17	96.7%

※薬学部留年生除く

表2. 2022年度アチーブメントテストの受験状況

2023/01/25本試験実施

2023/02/03追試験実施

学部・学科 在籍者数	受験者数 (名)	欠席者数 (名)	受験率 (%)
日文語日文学科 56名	39	17	69.6%
歴史文化学科 52名	40	12	76.9%
教育学科 140名	123	17	87.9%
- 幼児教育専攻 52名	49	3	94.2%
- 学校教育専攻 58名	50	8	86.2%
- 特別支援教育専攻 30名	24	6	80.0%
人間社会学科 57名	46	11	80.7%
スポーツ健康学科 95名	84	11	88.4%
薬学部 [*] 118名	99	19	83.9%
合計 518名	431	87	83.2%

*薬学部留年生除く

2. 2022年度の結果

表3・表4は2022年度の両テストの学科、専攻別の結果である。表中、英語 IA/英語 IBを共通教育の外国語科目として履修している学生を「英語履修者」として示している。(※本学の場合、薬学部のみ共通教育英語 IA/IB、IIA・IIBを必修科目)スコアから明らかなように、英語履修者の平均点が、受験者全体よりも高い傾向にある。大部分の学生が、共通教育の外国語として英語を履修しているが、中学、高等学校時代から英語に対して苦手意識を持つ学生、または不得意な学生は、本学入学後は他言語を履修し、英語に触れる機会が減少することが理由の一つと考えられる。

また入学時に実施したプレイスメントテストと1回生終了時に受験するアチーブメントテストの平均点のスコアは、本学新入生の英語力の一年間の推移を示している。2022年度について両テストのスコアを比較すると、アチーブメントテストの平均点が全体で1.6点、

英語履修者で 1.9 点、低い結果となった。但し、2022 年度アチーブメントテストは本試験日の悪天候が影響し、例年よりも受験率が低くなっている。プレイスメントテストと比べると受験率は 96.7%から 83.2%となった。そのため、これらの数値から確かな結論を導くことは困難と考えられる。

表 3. 2022 年度プレイスメントテストの学科・専攻別結果

2022/04/04実施

	受験者数 (内は欠席者数)	英語 履修者数	平均点		最高点 (300点)	最低点	標準偏差	
			全体	英語 履修者			全体	英語 履修者
全体 520名	503名 (17名)	482名	146.8	147.7	277.0	64.0	34.3	34.7
文学部 108名	102名 (6名)	80名	141.6	143.7	224.0	64.0	30.8	33.3
- 日文 56名	53名 (3名)	38名	149.8	155.7	219.0	64.0	33.8	32.8
- 歴史 52名	49名 (3名)	42名	132.8	133.3	224.0	84.0	28.3	30.1
教育学部 140名	134名 (6名)	139名	146.3	146.3	227.0	75.0	28.3	28.3
- 幼教 52名	49名 (3名)	52名	132.7	132.7	175.0	87.0	19.6	19.6
- 学教 58名	56名 (2名)	57名	159.3	159.3	216.0	114.0	26.5	26.5
- 特支 30名	29名 (1名)	30名	144.2	144.2	227.0	75.0	32.4	32.4
人間社会学部 153名	150名 (3名)	147名	132.3	132.8	213.0	71.0	26.2	26.4
- 人社 57名	56名 (1名)	56名	137.2	137.5	204.0	71.0	25.3	25.4
- スポ 96名	94名 (2名)	91名	129.3	129.9	213.0	78.0	26.3	26.5
薬学部 119名 ^{※1}	117名 (2名)	116名 ^{※2}	170.7	170.7	277.0	84.0	39.5	39.5

※1 薬学部留年生除く

※2 入学前単位認定者3名

表 4. 2022 年度アチーブメントテストの学科・専攻別結果

2023/01/25本試験実施

2023/02/03追試験実施

	受験者数 ()内は欠席者数	英語 履修者数	平均点		最高点 (300点)	最低点	標準偏差	
			全体	英語 履修者			全体	英語 履修者
全体 518名	431名 (87名)	482名	145.2	145.8	270.0	49.0	36.5	36.4
文学部 108名	79名 (29名)	80名	146.6	150.5	218.0	49.0	33.2	32.2
- 日文 56名	39名 (17名)	38名	158.5	163.5	218.0	64.0	30.8	30.2
- 歴文 52名	40名 (12名)	42名	135.0	138.6	215.0	49.0	31.2	29.3
教育学部 140名	123名 (17名)	139名	143.1	143.1	216.0	60.0	32.2	32.2
- 幼教 52名	49名 (3名)	52名	129.2	129.2	194.0	68.0	28.8	28.8
- 学教 58名	50名 (8名)	57名	153.5	153.5	216.0	60.0	33.9	33.9
- 特支 30名	24名 (6名)	30名	149.8	149.8	201.0	119.0	23.7	23.7
人間社会学部 152名	130名 (22名)	147名	128.8	129.3	231.0	49.0	28.9	29.0
- 人社 57名	46名 (11名)	56名	130.2	130.5	231.0	49.0	36.4	36.7
- スポ 95名	84名 (11名)	91名	128.0	129.3	191.0	75.0	23.7	29.0
薬学部 118名 ^{※1}	99名 (19名)	115名 ^{※2}	168.4	167.9	270.0	100.0	40.5	40.4

※1 薬学部留年生除く

※2 入学前単位認定者3名

3. 今後に向けて

英語習熟度測定テストの実施は、教務課や各学科、アクセスルームなどの協力を得て、手順を単純化し、効率的に実施することができている。

しかし、本学で実施している対面のマークシート方式テストはオンライン方式テストと比べると、少なからず教職員の業務に負担がかかることや、実施後のテストスコアの返却が遅延するなど、学生へのフィードバックが十分には行われていないといった課題も残っている。コロナウイルスの影響で学生を取り巻く通信環境も大きく変化し、オンラインテストの需要がますます高まったことも踏まえて、2023年度はテストの実施方法や内容の見直しを図りたい。

III. e-Learning プログラム関連

鈴木 幸平・森本 正太郎

学習時間を確保（授業外学習）する必要性から、e-Learning プログラムを本学でも英語教育の一環として導入している。しかしながら、本学学生の英語学習に対する動機づけは比較的低く、e-Learning 学習を学生の自主利用に任せていると、実効性が極めて低くなる傾向にある。そこで本学では、英語 IA/IB 及び英語 IIA/IIB（再履習クラスを含む）の成績評価 10%に、e-Learning プログラムに設定された課題達成度を含めることで、学生の取り組み意欲の向上を図ってきた。加えて、Summer Activity などイベントを行うことで、英語 IA/IB、英語 IIA/IIB を履修していない学生にも e-Learning を自発的に利用してもらえるような工夫も行ってきた。今年度は、2021 年度と同様に Word Mine、KICKOFF、Practical English Starter、Practical English 8 の 4 種類のプログラムを採用した。さらには、昨年度導入した双方向の英会話トレーニングプログラムである Virtual Live Training の実施回数を増やし、本格的に運用を行った。キャリアセンターの「キャリア開拓塾」との連携も継続しており、難関企業への就職を目指す学生を対象に、KICKOFF を用いた TOEIC®対策への取り組みをサポートしている。なお、e-Learning の導入・設置経緯や過去の運用状況に関しては、過去の『ACE Review』で、詳しく紹介している。

1. 主な取り組み

本学の e-Learning は、2017 年度より ReallyEnglish 社のプログラムを利用している。2022 年度は、前年度に引き続き、日常、ビジネス、旅行など豊富なトピックでコミュニケーションの基礎を学習する Practical English Starter を英語 IA/IB の学生向けに課し、Practical English 8 を英語 IIA/IIB の学生に向けて導入した。これらの e-Learning プログラムの感想については e-Learning のアンケート調査の考察でも言及するが、履修者及び英語授業担当教員からともに肯定的な評価を得た。

2022 年度の英語履修者の e-Learning 利用状況は表 1 の通りである。2022 年度では「レッスンの取り組みなし」、すなわち課題をまったく行っていない学生の割合は 12.8%となっている。e-Learning プログラムに設定された課題達成度が成績評価の 10%になることが、英語授業担当教員を通して、履修者に浸透してきたことが伺える。ただ、各学年に目をやると、1 年生の前期は課題未実施の学生が 5.5%である一方で、二年生の後期は課題未実施の学生が 17.3%となっており、e-Learning 課題に継続的に取り組むよう働きかける必要がある。

表 1. 2022 年度 共通教育英語履修者の e-Learning 利用状況

		登録率		課題達成率			レッスンの取り組みなし		
		(%)	比較	(%)	比較		(%)	比較	
			対前年度		対前期	対前年度		対前期	対前年度
1回生 英語IA/IB	前期	97.4		84.7			5.5		
	後期	98.0		78.7	-6.0		13.1	+7.6	
	年間	97.7	+1.8	81.7	+7.1		9.3	-3.8	
2回生 英語IIA/IIB	前期	99.8		77.8			15.1		
	後期	99.6		76.1	-1.7		17.3	+2.2	
	年間	99.7	+0.3	77.0	+4.2		16.2	-3.3	
合計	前期	98.6		81.3			10.3		
	後期	98.8		77.4	-3.8		15.2	+4.9	
	年間	98.7	+1.0	79.3	+5.6		12.8	-3.6	

※再履修クラスを除く

e-Learning のアカウント登録数及び利用率の向上を促すため、本センターでは様々な取り組みを行ってきた。その一つに「e-Learning 学内相談会」が挙げられる。これは e-Learning 導入時より継続して実施しており、自習者に広く e-Learning を知ってもらうことに焦点を当てて開催している。2022 年度は 5 月 25 日から 6 月 1 日まで 1 週間にわたり対面で実施し、教育学部学校教育専攻の「基礎ゼミ III」のスタンプシート課題の一つとしても利用された。e-Learning 学内相談会実施状況は表 2 の通りである。

表 2. 2022 年度 共通教育英語履修者の e-Learning 利用状況

日時	場所	担当者	参加者	質問内容
5/25~6/1 12:45~13:25	4-505 (情報Ⅲ)	森本	学校教育専攻 32名	スタンプシートについて
			その他 12名	e-Learning登録方法や・英語評価との関連について
合計			44名	

ACE では、英語履修者や自習者に e-Learning の利用を広く推奨し、真摯に取り組んだ学生を表彰する制度を設けている。具体的には、年間の e-Learning 学習に対して表彰する「e-Learning 表彰式」、夏休みと春休みの長期休暇期間の自主学習を促すことを目的とした Summer Activity と Spring Activity を実施している。

「e-Learning 表彰式」について、2022 年度の結果と前年度報告書執筆後に表彰を行った 2021 年度の結果を報告する (図 1)。2021 年度「e-Learning 表彰式」は 1) 35 時間以上を学習していること、2) 成績が良好なことという 2 つの条件から、最優秀賞 1 名、優秀賞 3 名に表彰を行った (表 3)。

図 1. 2021 年度 e-Learning 表彰式



表 3. 2021 年度 e-Learning 表彰式の受賞者

	学部・学科	学年	プログラム	平均 テストスコア	合計 学習時間
最優秀賞	人間社会学科	1回生	PES	93.6%	97時間51分
			PE8	73.0%	
			KICKOFF	73.5%	
			WM2	-	
優秀賞	スポーツ健康学科	3回生	PE8	47.0%	127時間22分
			WM2	-	
	スポーツ健康学科	4回生	PES	52.0%	112時間36分
			WM2	-	
	スポーツ健康学科	2回生	PES	83.0%	105時間58分
			PE8	34.0%	
		WM2	-		

PES・・・Practical English Starter

PE8・・・Practical English 8

WM2・・・Word Mine 2

2022年度の「e-Learning表彰式」は、多くの学生が参加できるよう、表彰条件を緩和し、
1) 成績が良好なこと、2) 20時間以上を学習していることという2つの条件から、優秀賞2名、努力賞2名、優良賞3名に表彰を行った(図2・表4)。

図2. 2022年度 e-Learning 表彰式
左：優秀賞および努力賞（学長室）、右：優良賞（ACE セミナー室）



表4. 2022年度 e-Learning 表彰式の受賞者

	学部・学科	学年	プログラム	平均 テストスコア	合計 学習時間
最優秀賞	該当者なし				
優秀賞	スポーツ健康学科	3回生	PES	70.0%	63時間16分
			KICKOFF	43.0%	
	人間社会学科	2回生	PE8	77.0%	47時間50分
			KICKOFF	84.0%	
努力賞	スポーツ健康学科	3回生	PES	61.0%	298時間30分
			PE8	32.0%	
		KICKOFF	35.0%		
	スポーツ健康学科	3回生	PE8	31.5%	272時間46分
優良賞	日本語日本文学科	2回生	PE8	81.5%	26時間37分
			KICKOFF	80.0%	
		WM2	-		
	スポーツ健康学科	1回生	PES	94.5%	24時間16分
	教育学科	2回生	PE8	72.5%	21時間14分

PES:Practical English Starter

PE8:Practical English 8

WM2:Word Mine 2

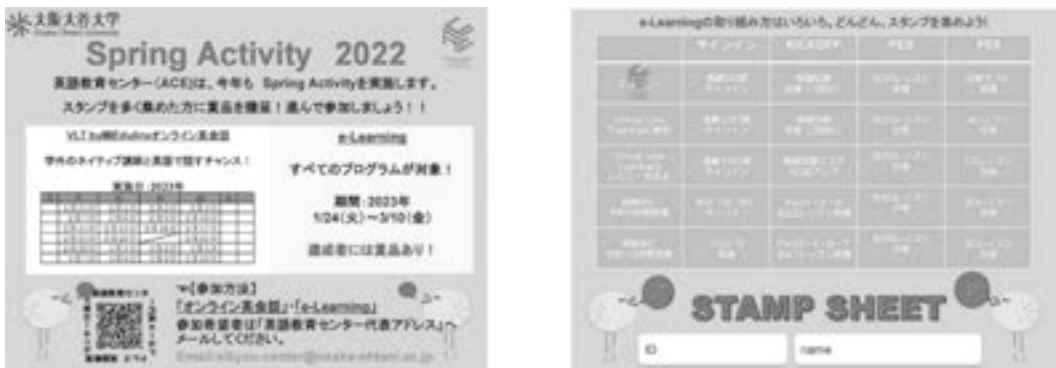
Summer Activity は、TOEIC®受験を考えている、または受験する予定の学生に焦点を当て、TOEIC®対策教材として e-Learning に取り組めるよう、KICKOFF を活用した企画を行った。Summer Activity に取り組んだ学生への表彰は、1) Virtual Live Training (オンライン英会話) を 1 回受講、2) WordMine を 5 時間受講していること、3) KICK OFF を 20 ユニット合格することという 3 つの条件のうち 2 つ以上クリアすることで、7 人の学生が条件を達成している (図 3)。

図 3. 2022 年度 Summer Activity フライヤーと表彰式



2021 年度に続き、2022 年度も 1 月から 3 月の春休み期間中に Spring Activity を開催している。2022 年度の Spring Activity では、Summer Activity と評価項目の趣を変え、サインインの回数や、TOEIC®模擬試験のスコアアップ幅、e-Learning のテストスコア、さらに Virtual Live Training への参加状況まで総合的に評価する方式を取っている (図 4)。

図 4. 2022 年度 Spring Activity フライヤーとスタンプシート



2022年度も2021年度に引き続き、双方向英会話トレーニングプログラムである、Virtual Live Training の運用を行った。このプログラムはオンラインで行われているため、休み期間中も安定して開催が可能である。Virtual Live Training は、4人の学生に対して1人のネイティブスピーカーが1レッスン50分の英会話トレーニングを行うプログラムで、Zoomを用いて開催されている。今年度は、合計70回の開講が企画されている。

2. アンケート調査

e-Learning の利用を促進するためには、実際に使用している学生の意見を聞くことが重要である。本学の場合は表1で示した通り、共通教育英語履修者の e-Learning 登録率が90%を超えているので、この英語履修者を対象に e-Learning に関する利用意識を探ることとした。加えて、学習を促す役割を担う教員側の意見・感想を聞くことも行った。

2.1 実施時期・対象

アンケート調査は、学生・教員ともに英語 IA/IB 及び英語 IIA/IIB の後期授業の第15週目に実施した。事前に学生向けアンケートとマークシートを授業担当教員へ配布し、授業内で実施してもらうよう依頼した。また、回収したアンケートは期限内に教務課または英語教育センターに提出してもらう方法をとった。回収率などの詳細は表5・表6の通りである。

表5. 2022年度 教員向けアンケート調査の実施詳細

対象教員	19名
回収枚数	18枚
回収率	95%

表6. 2022年度 学生向けアンケート調査の実施詳細

	英語I [※]	英語II [※]
配布枚数	523枚	558枚
回収枚数	444枚	479枚
回収率	84.9%	85.8%

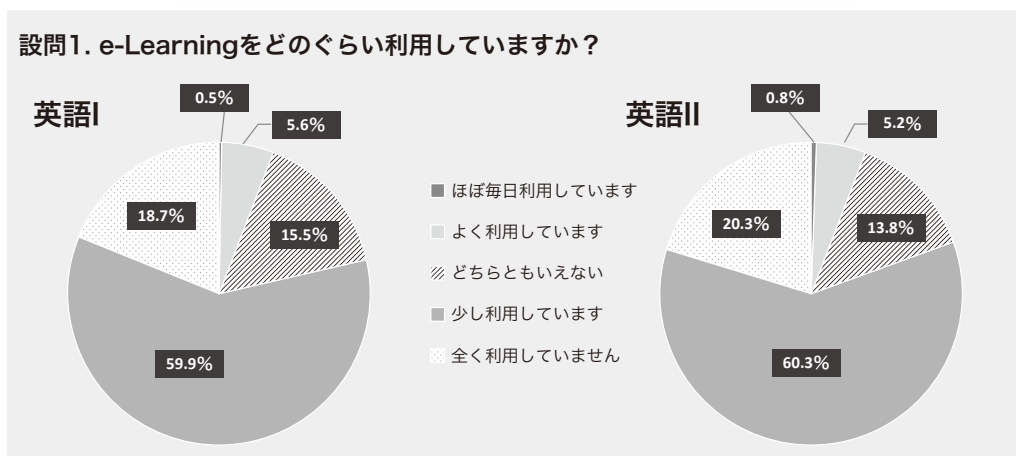
※再履修クラスを含む

2.2 学生向けアンケート調査結果

アンケート内容は6つの項目を設定し、回答は5段階評価とした。各項目の内容と集計結

果を以下にまとめた。「設問1. e-Learningをどのくらい利用していますか？」に対する回答は図5の通りである。

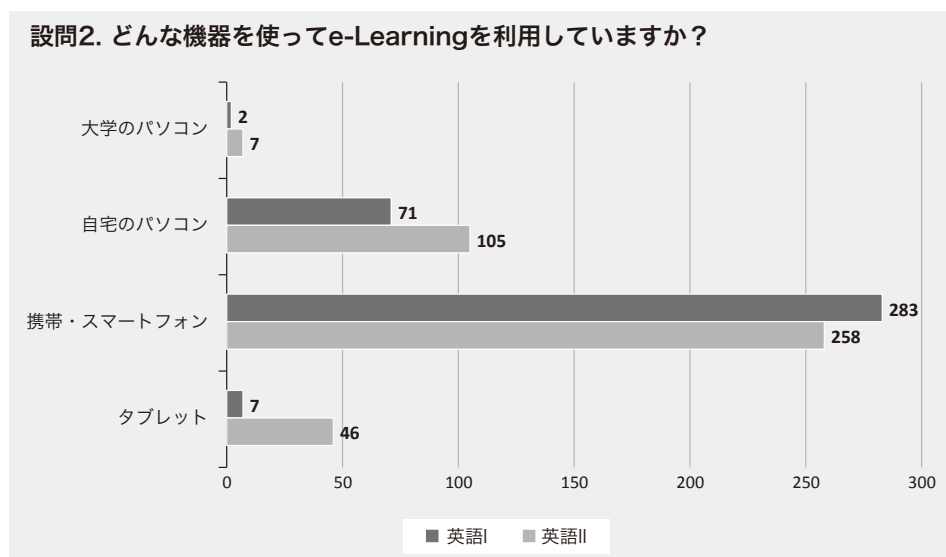
図5. 2022年度 教員向けアンケート調査の実施詳細



2022年度の調査では、両学年で「少し利用しています」が半数を超え、共通して最も回答が多い項目となった。一方で、「全く利用していません」と回答した学生が英語I、英語IIにおいて、それぞれ18.7%、20.3%となった。

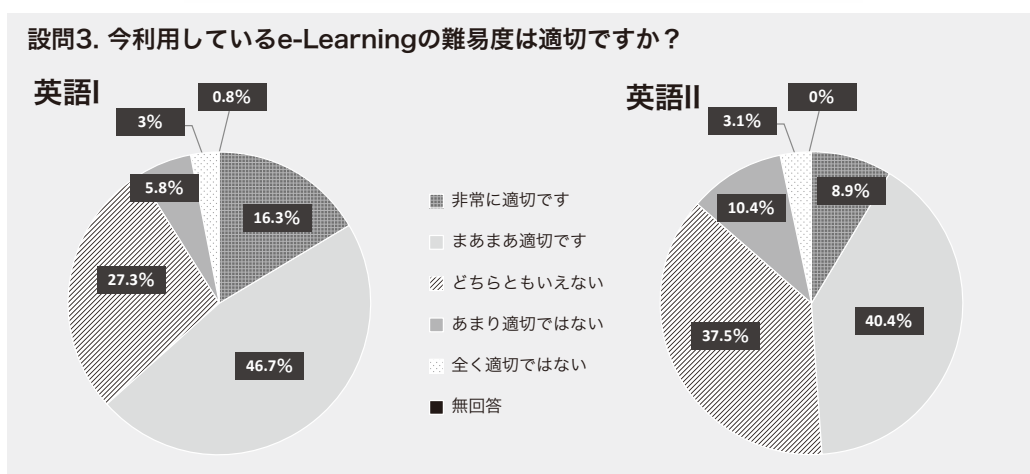
「設問2. どんな機器を使ってe-Learningを利用していますか？」については、英語I履修者、英語II履修者ともに、大半の学生が携帯電話やスマートフォンを使うと答えている(図6)。これは、学生が通学などの空き時間にe-Learningに取り組んでいる可能性を示唆していると考えられる。この反面、大学のパソコンと答える学生は少ないという結果が得られた。今後も学生が携帯電話を用いてe-Learningを利用する傾向が続くことが予測される。

図6. e-Learningを利用するとき使用する機器



「設問 3. 今利用している e-Learning の難易度は適切ですか?」については、「まあまあ適切です」か「非常に適切です」と回答している学生が、英語 I 履修者では半数を超えており、英語 II 履修者ではおおよそ半数となっている (図 7)。このことから学生は教材のレベルに関してある程度満足していることが伺える。この一方で、「適切ではない」と答えている学生も、英語 II 履修者では 10%を超えている。下記設問 5 の結果より、英語 II 履修者で、Practical English 8 は難しいと答えている学生が 17 名おり、今後 Practical English 8 は非常に幅広い難易度のレッスンで構成されていることを周知していく必要がある。

図 7. e-Learning の難易度について



「設問 4. 今後、英語の授業がなくても引き続き e-Learning を利用したいと思っていますか?」については、英語 I 履修者、英語 II 履修者ともに「どちらともいえない」が最も多い結果となった。この一方で、「利用したい」と答えている学生は 2 割から 3 割おり、e-Learning で英語をものにしたいと考えている学生は一定数存在している (図 8)。

「設問 5. 全く利用していない理由は何ですか?」については、設問 1 で「全く利用していない」を選んだ学生を対象としている。結果として、英語 I 履修者、英語 II 履修者共に「時間がない」が半数以上を占めた (図 9)。利用できる環境が整っていないと答える学生は特に英語 I 履修者で多く、今後できるだけ大学の設備の利用を勧めたい。また、上述したように英語 II 履修者で「レベルが高すぎる」と回答した学生が 17 名存在する。このような学生にどのようにアプローチするかも今後の課題としたい。

図 8. 今後の利用について

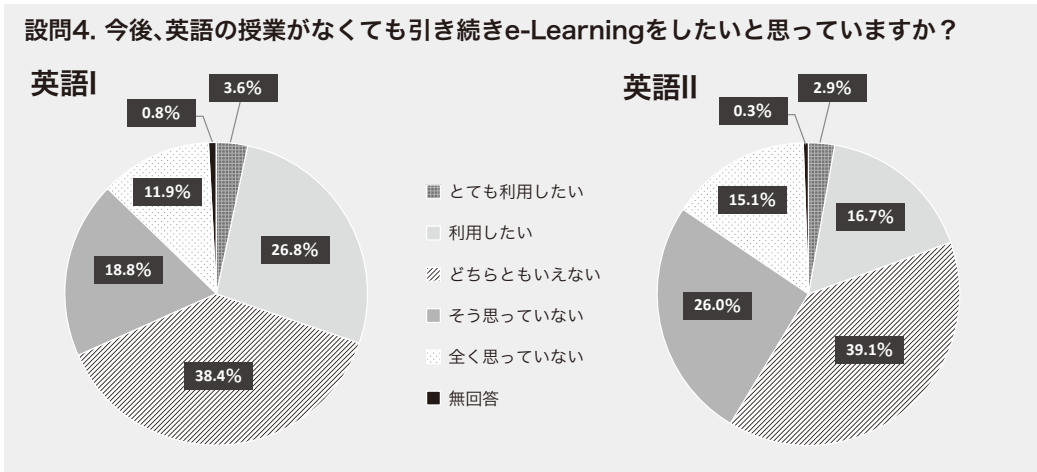


図 9. 全く利用していない理由

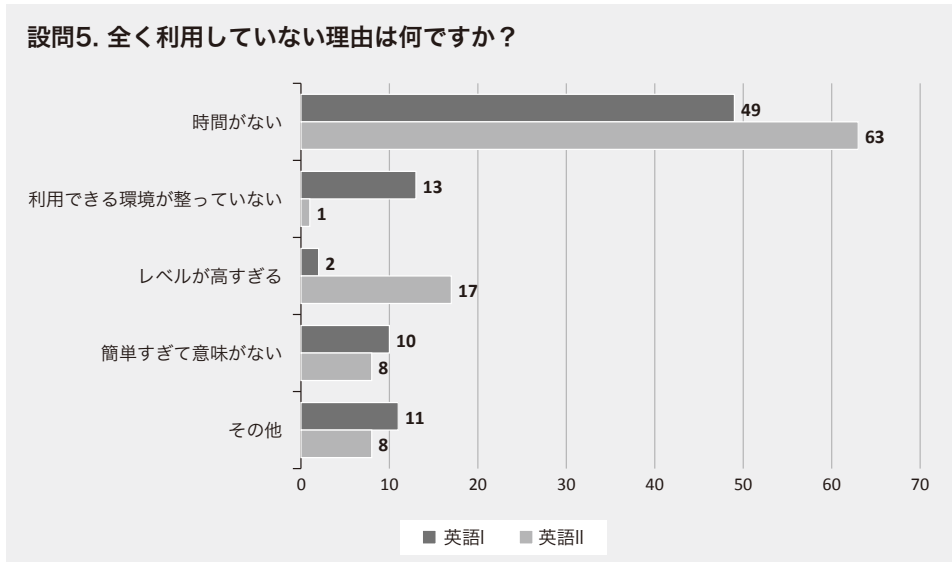


表 7. 設問 5 のその他を選んだ学生の自由記述

記述内容	出現回数※	
	英語I	英語II
やる気の問題	8	5
期限忘れ	2	0
アプリの問題	1	1
利用方法が分からない	5	1

※似た記述をカウント

表 8. 他の e-Learning 利用に関する記述

記述内容	英語I	英語II
	英単語のアプリmikan スタディサプリEnglish 院試で活用できる英語のプログラム	スタディサプリEnglish 英語の基本を学ぶプログラム

2.3 教員向けアンケート調査結果

英語 I、英語 II を担当する教員全員を対象として、e-Learning に関するアンケートを行った。アンケート内容は 4 項目とし、選択式と自由記述式を組み合わせで行った。

教員へのアンケートより、e-Learning の難易度については、担当するクラスレベルに拠るところもあるが、駆け込みで e-Learning 課題に取り組む学生が多く、学生にとって難しすぎると考えている教員は多くない。再履修クラスを履修する学生で難しいと感じている学生がいることから、再履修クラスに割り当てる e-Learning 教材を検討する必要があるかもしれない。次に PES と PE8 のどちらが学生に適しているかについて、多くの教員は英語 I の履修学生には PES が、英語 II の履修学生には PE8 がより適していると考えているようである。

英語教育センター事務のサポートに関して、e-Learning の使い方がわからない学生への対応に関するコメントが見られ、日頃幅広くご対応いただいている先生方に感謝したい。英語教育センターのサポートについては多くの教員から役に立ったとの回答が得られており、コロナ禍の中、英語教育センターが教員を適切にサポートしていたことが伺える。

3. 今後に向けて

本学が e-Learning を導入した 2017 年度より、本学では一貫して ReallyEnglish 社のプログラムを利用してきた。この間、2021 年度に、学生が通学時などの隙間時間で利用しやすいか、教員が講義で使用しやすいか、Virtual Live Training のような英会話プログラムがあるかなどの面から、再検討を行い、2022 年度以降も ReallyEnglish 社の e-Learning プログラムを採用することとなった。

2023 年度は、Virtual Live Training に加え、学生が個人で英語話者と話すことができる EZ to Talk 2 を導入する予定で、グループよりも個人で英会話を学びたいと考える学生が主体的に授業外学習に取り組める機会となることが期待される。今後 e-Learning プログラムがより本学学生の英語学習意欲を高めることができるよう、一層努力していく。

IV. 英語検定試験

池田 香代

英検の取得級や TOEIC®スコアは学生自身の英語力を公的に証明できるものであり、留学や就職活動にも利用されている。ACE では英検・TOEIC®の申込受付や学内実施、試験対策のサポートを行っている。

1. 検定試験の実施

コロナ禍の収束が不透明な中、英検は昨年度に引き続き 2022 年度においても、年 3 回の試験申込受付を実施することができた。一次試験の合格者には二次試験（面接）対策のサポートも行った。2022 年度の英検受験状況は表 1 の通りである。

表 1. 2022 年度英検の受験状況

	第1回検定試験			第2回検定試験			第3回検定試験		
	受験者数	一次合格	二次合格	受験者数	一次合格	二次合格	受験者数	一次合格	二次合格※1
準1級	—	—	—	—	—	—	2	—	
2級	3	—	—	2	1	1	3	2	
準2級	1	1	1	—	—	—	—	—	—
合計数	4	1	1	2	1	1	5	2	

※1 結果：未確定

また、英検 S-CBT での受験申込みもあった。この試験は英検（従来型）と同じ出題形式を取りつつ、スピーキングテストを吹込み式として 1 日で 4 技能を測ることのできる試験である。毎週実施されているため受験者が都合に合わせて受験日を選択できる利点がある。

英検は教員採用試験において、取得級により一部試験免除・加点等（自治体による）に活用される。教採受験希望者が英検 S-CBT で受験すると、検定料が安価となる助成制度があることを今年度は周知し、受験を推奨した成果もあり、昨年度より受験者数が向上した。

TOEIC® IP テストは 2022 年度もオンライン試験だけでなく、後期にマークシート試験を実施することができた。2021 年度からキャリア開拓塾の要望により、実施回数を増やすこととなり、2022 年度においても 5 月・8 月・1 月にオンライン試験、11 月にマークシート試験と、計 4 回実施した。

オンライン試験においては受験者が指定されたテスト期間内に、都合のよい場所や時間で受験することができる利便性がある。これらを HP や掲示板、tani-WA などで周知し、受

験を推奨した。また、TOEIC®を受験したことのない学生に向けたオンデマンド動画の配信も昨年度に引き続き行った。表2に2022年度TOEIC® IPの受験状況をまとめた。

表2. 2022年度TOEIC®の受験状況

	試験形式	日程	教室	受験者数	平均点
第1回	オンライン	5/27～6/9	－	11	338.6
第2回	オンライン	8/8～8/23	－	10	456.5
第3回	マークシート	11/26	11-201	9	408.9
第4回	オンライン	1/6～1/16	－	3	550.0

2. 今後に向けて

2022年度もコロナ禍の情勢に応じて、検定試験の実施及びそれらに関する学習機会の提供は昨年度と同様に行われた。こうした経験からの知見にもとづいて、今後も検定試験や対策講座の対面実施とオンライン実施の併用を引き続き継続し、多様な受験方法を推奨する。

英検・TOEIC®共に受験者数を向上させていくことが今後の課題である。留学や就職、教免取得などに有利となる検定試験の意義を、さらに周知していく必要がある。英語科目担当教員、国際交流室、キャリアセンターなどと連携し、授業や学内において情報発信の協力を求めている。

また、試験対策のサポートやe-Learningの周知と共に、より積極的な活用を推奨し、好結果につながる支援を継続していく。

V. ACE 事務室

荒川 亜希

ACE 事務室では、これまで「検定試験」、「教材貸出」、「e-Learning」を中心に学習支援を行ってきた。2022 年度の取り組みとしては、国際交流室と連携してイベントを企画するなど、2021 年度のキャリアセンターとの連携に引き続き、他部署と連携に注力して取り組んだ。イベントについては ACE プログラムの項目、検定試験については英語検定試験の項目で詳細を述べているため、ここではそれ以外について報告する。

1. 教材貸出

事務室では小学校・中学校の英語教科書や、語学教材、多読本（Extensive Reading）などを多数揃え、教材室に配架している。これらの中で学生が最も興味を示しているのは、TOEIC®や英検などの検定対策教材である。そのため、事務室では最新の教材・学生の要望に合った教材を取り揃えている。2022 年度は学生からのオススメ検定教材を聞き取りし、HP に掲載、学生に案内するなど、検定教材を通して教材室の広報をすることも行った（詳細は広報活動に記載）。

2022 年度の教材貸出状況は表 1 の通りである。過去 2 年はコロナウイルスの影響でオンライン授業の期間もあったため、貸出者および貸出冊数が減少傾向にあったが、2022 年度はコロナウイルス発生前である 2019 年度の数値に近い状況となった。

表 1. 2022 年度教材貸出状況

		2023/01/31までのデータ	
		貸出者数 (名)	合計冊数 (冊)
2022年	4月	20	29
	5月	11	14
	6月	22	37
	7月	18	23
	8月	14	17
	9月	13	20
	10月	27	40
	11月	40	63
2023年	12月	28	34
	1月	18	27
	2月	-	-
	3月	-	-
合計		211 ^{※1}	304

※1 重複者あり

2. e-Learning サポート

e-Learning に関するサポートもこれまで通り行っている。ログイン方法やパスワード再発行などの手順に関する質問から、アプリの不具合といった機器トラブルなど、学生からの質問は多岐に渡る。英語 IA/IB、英語 IIA/IIB の履修者は、e-Learning 課題達成度が成績評価の 10%に含まれているため、課題締め切り前には多くの学生からの問い合わせに対応することとなる。加えて、e-Learning 業者による Virtual Live Training (オンライン英会話) の予約受付・教材配信・業者との調整も事務が一括で担当している。Virtual Live Training を導入した 2021 年度は、年 20 回の実施であったが、2022 年度は本格的に運用することとなり、年 70 回の実施が確定したため、作業量も増えることとなった。現在は予約受付業務の効率化が課題となっている。

3. その他の学習支援

キャリアセンターが起ち上げている「キャリア開拓塾」の学生を対象とした TOEIC® スコアアップに対するサポートも行った。2022 年 7 月に実施した「キャリア開拓塾生の集い」では実施場所としてセミナー室を提供し、その際に事務から TOEIC®対策としての e-Learning の活用を案内した。加えて、実施状況も定期的に伝えている。e-Learning 受講時間・修了基準の達成率を伝えることで、自身の学習状況を把握し、今後の学習計画に役立ててもらうことが目的である。特にキャリア開拓塾 3 期生については、TOEIC®試験に向けた学習状況の聞き取りと、学習計画の共有を積極的に行うようにした。2022 年度は 2 名の学生に対して計 10 回の面談を行った。

他部署との連携だけでなく、授業内において ACE の案内を行っている。毎年、学校教育専攻 1 回生の「基礎ゼミⅢ」や、キャリア教育科目である「キャリアデザイン」の授業内で ACE ツアーを実施している。過去 2 年はコロナウイルスの影響により、オンデマンドや動画紹介での実施であったが、2022 年度は対面で実施することができた (図 1)。ACE ツアーでは、教材案内や e-Learning コンテンツの紹介、加えて Virtual Live Training のデモンストレーションなどを行い、ACE 活動の周知を図った。

図 1. 「キャリアデザイン」ACE ツアー



その他、2021 年度より実施している学習支援として、サッカー部への e-Learning サポートが挙げられる。顧問教員からの依頼で、一部のサッカー部員を対象に e-Learning 利用方法の案内、実施状況を報告している。2022 年度は 3 名の部員を対象に 5 月末~11 月末まで、毎週、e-Learning の実施状況を集計・報告した。これらの学生は毎週、一定時間の e-Learning 受講を目標に取り組んでおり、その結果として 2022 年度の「e-Learning 表彰式」の努力賞として選ばれ、学長室で表彰を受けることに繋がった。

4. 今後に向けて

検定対策の教材については毎年、新しいものが出版されるので、今後も学生の要望に応じて豊富に取り揃えていく。e-Learning に関しては、これまで通りプログラムの案内やトラブルに対応していく。課題となる Virtual Live Training の予約受付業務については、効率的な予約システムを検討し、取り入れたい。キャリア開拓塾生については、キャリアセンターから英語教育センターへ来る流れが確立しつつあるため、今後も連携を強化し、サポート体制を充実させる。また、その他の部署とも連携して、これからも英語学習の相談、検定試験・e-Learning に関する相談に対応していき、学生が継続して英語を学べる環境づくりをサポートする。

VI. 英語入試作問

小山 敏子

2016年度の英語教育センター設置準備室設置以降、本学が実施している学外入試の作問作業の統括をACEが担ってきた。本学の英語担当専任教員数が減少していく一方で、2023年度入試から、公募推薦入試（前期）にA日程、B日程が設定されたため、年々、作問作業担当教員の負担は増加している。

今年度は、英語担当専任教員5名で6つの入試の作問作業にあたった。問題は例年通り高等学校学習指導要領で目標とされている「英語での情報や考えなどを的確に理解したり伝えたりする基礎的な能力」をみることに主眼をおいて作成し、出題形式は多肢選択問題（マークシート解答）である。作業は、準備室時代に入試広報室長と相談して制定した「英語出題ミス・採点ミス防止のマニュアル」に則り、慎重に進められた。また、例年同様、ACE運営委員が各回の入試問題原稿の校正（主に様式の確認）を担当した。

入試の出題傾向と対策について、受験生に対して公開している傾向と対策は表1の通りである。

表1. 本学入試（英語）の出題傾向と対策

	入試区分	
	公募制推薦入試（前期<A・B日程>・後期）	一般入試（前期・中期・後期）
傾向	<ul style="list-style-type: none"> ①問題構成は大問5つ程度。 ②語彙・文法・語法の知識を測る問題と対話の流れを読み取る会話文が出題される。 ③600 words程度の英文の読解力が問われる。 ④対話文を正確に構成できる力も問われる。 	<ul style="list-style-type: none"> ①問題構成は大問5つ程度。 ②語彙・文法・語法の知識を測る問題と対話の流れを読み取る会話文が出題される。 ③700 words程の英文の読解力が問われる。 ④対話文を正確に構成できる力も問われる。
対策	<ul style="list-style-type: none"> ①長文は英字新聞のコラムなどから出題されるため、日頃からまとまった量の英文を読み、内容を把握する練習をしておくこと。 ②高等学校で学習した語彙・文法・語法の知識の復習をしておくこと。 ③日常会話で使われる慣用表現を身につけておくこと。 	<p>対策の基本は公募推薦入試①、②、③と同様であるが、一般入試は、長文問題の語数が多くなる。また、その他の問題でも選択肢が増えるなど難易度があがることに留意すること。</p>

今後は、高等学校の新学習指導要領（平成30年度告示）が2022年度から年次進行で実施されるため、2019年度に設定した現行の出題構成（詳細は『ACE Review 2021』を参照されたい）の改訂も視野に入れ、本学のアドミッションポリシーを踏まえた作問作業を行っていく必要が考えられる。

VII. 広報活動

四重田 陽美

英語教育センター（ACE）の役割は、本学における英語教育の拠点として、学生たちの英語力を上げることである。このため、活動内容を適切に伝える広報活動が欠かせない。2022年度は、2021年度から引き継がれた、フライヤーの作成と掲示、ホームページの作成と更新、各種広報媒体への掲載、オープンキャンパス活動、ACE ロゴの作成に加え、感染者数減少と積極的には判断できないコロナ禍の影響下で、感染対策を講じた上でのハロウィンイベントの開催など、多方面にわたる広報を行った。

1. フライヤー作成・掲示

ACEを紹介するフライヤーを新入生に配布した（図1、A4両面／表面カラー）。

また、一年を通して、各種案内用のフライヤーも作成した。英検、TOEIC®学内試験・オンライン試験、e-Learning 学内相談会、Summer Activity、ハロウィンイベント、クリスマスウィーク&イベント、Spring Activity などである。これらのフライヤーは、本学ホームページで案内するとともに、学内に掲示することで、学生への周知をはかった。

図1. 2022年度フライヤー（表）



2. ホームページ・各種広報媒体への掲載

本学ホームページにおいて11コンテンツを運営し、英語情報の提供とACEの宣伝に努めた（コンテンツは「ACE PV」「新着情報」「センター長メッセージ」「英語教育センターのご案内」「センター教員」「英語教育センターの役割」「利用案内」「e-Learning について」「資格・検定試験について」「ACE REVIEW（年次レポート）」「Blog SPEAK EASY」）。

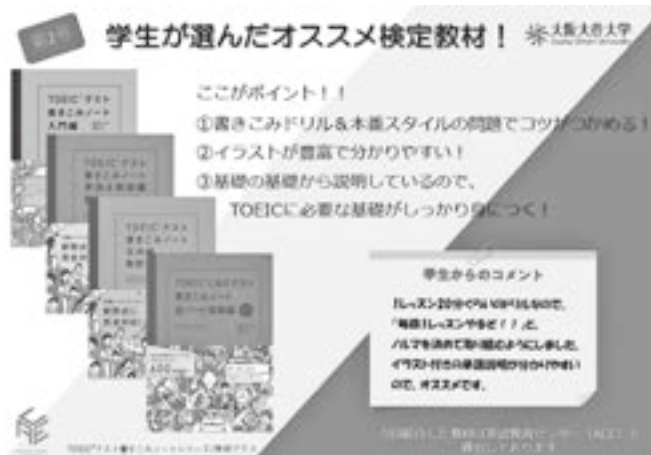
とくに「新着情報」では、ACEプログラムやイベント、講座についての案内や報告を速やかに掲載し、学生の関心を高めるよう心がけた（図2）。

図2. ホームページ



また、2022年度の新しい企画として、従来の「Let's Enjoy Reading!」を止め、「学生が選んだオススメ教材!」を紹介した(図3)。TOEIC®試験を受験した学生が、実際に使用していた教材の良い点を紹介していくもので、計5回公開した。TOEIC®試験などの検定試験に向かう学生に、学びのポイントを示し、学習姿勢をサポートすることができた。

図3. 学生が選んだオススメ教材!



紙媒体の広報としては、本学の『大学案内』にセンター長メッセージやACEの施設紹介を掲載した(図4)。さらに、オープンキャンパスDMやリーフレット、学生ハンドブックなどにおいてもACEの広報に努めた。

図4. 大学案内



3. オープンキャンパス

2022年度オープンキャンパスは、新型コロナウイルスが収束しない状況とはいえ、政府のウィズコロナの指針に則って、感染に細心の注意を払いながらの対面実施となり、午前午後の2回に分けて実施する日もあって、以下の表1の通り、初回を除く計5回実施できた。実施内容については、体験企画の提供とキャンパスツアーの受け入れである。

体験企画においてはVLT (Virtual Live Training) というオンライン英会話を紹介、あるいは本学非常勤講師によるZoomを使っての「ランチタイム英会話」を紹介した。いずれの場合も、訪問者の関心にあわせて柔軟に運用することを心掛けた。なお、本来の企画時間は11:30~12:20と12:40~13:30とし、それ以外の時間帯は教室前を通る訪問者に案内するため、時間外にも待機した。7月のOCはB教室を使用した。訪問者の動線を考慮し、8月以降は、入試広報課に相談してセミナー室を使用した。キャンパスツアー参加者を誘導できたため、4回目以降の方が参加者も増え、企画提供の効果もあがった。

表1. 2022年度オープンキャンパス参加者数

時間	場所	訪問者数*	主な実施内容
1回目 5/28 (土)	2022年度はネイティブ講師が不在であることから、5月のOCについては不参加		
2回目 7/16 (土)	オンライン英会話 「VLT」紹介 ①11:30~12:20 ②12:40~13:30	1-102 (B) 10名	・B教室前の廊下にEnglish CaféのTVモニターを設置、Zoomを繋げてオンライン英会話の様子が見えるようにする ・B教室のスクリーンでもZoomを映し、興味のある学生・保護者には教室内で見てもらうよう、案内する
3回目 7/17 (日)	Zoomを使って 「ランチタイム 英会話」を紹介 ①11:30~12:20 ②12:40~13:30	1-102 (B) 2名	・廊下に検定教材を配置、ACEポスターを貼るなど、移動の学生・保護者に見てもらえるようにする
4回目 8/27 (土)	オンライン英会話 「VLT」紹介 ①11:30~12:20 ②12:40~13:30	6組、26名 (キャンパスツアー参加者)	・場所をセミナー室へと移動。集客方法については入試広報課の提案で以下の3つを実施 ①キャンパスツアーのコースにACEを盛り込む(但し、ツアー時間に制約があるため、この時は施設紹介のみ) ②ツアー終了後に、再度ACE企画紹介のアナウンスを行い、参加希望者をACEまで連れてきてもらう ③志学館前の巨大看板でのポスターを掲示
5回目 8/28 (日)	Zoomを使って 「ランチタイム 英会話」を紹介 ①11:30~12:20 ②12:40~13:30	18組、55名 (キャンパスツアー参加者)	
6回目 9/25 (日)	Zoomを使って 「ランチタイム 英会話」を紹介 11:30~12:20	2名(直接) 12組、26名 (キャンパスツアー参加者)	・プレ入試の関係、Zoomの実施時間を2回から1回に変更 それ以外の実施手順については8月と同じ

4. その他の事業

例年、在学生オリエンテーション・新入生オリエンテーションにおいて、ACEの説明と動画の再生を行っている。2022年度は新入生を対象に実施している英語プレイスメントテスト終了後の時間を使って「ACE動画」を再生した。

さらに、2021年度に募集した「ACEロゴ」が完成した。ロゴは、二種類で、通常用とイベント用で、本年度から活用している。学生のみならず、本学に興味を持ってくださる方々にも浸透することが期待できる。

図 5. ACE ロゴ



5. 今後に向けて

2022年度は、コロナ禍3年目ということもあり、広報活動においてもその影響がなかったわけではない。しかし、細心の注意をもって感染対策を行いながら、少しずつ広報活動も常態に近づける工夫がなされた。オープンキャンパスにしる、ハロウィンイベントやクリスマスイベントを通じて英語を身近に楽しめる企画も、なんとか開催できたのは収穫であった。

また、2022年度は英語を母国語とする特任講師不在のため、一貫した英語教育のために、VLT等を外部に委託せざるを得なかったが、2023年度は特任講師も決定した。したがって、2023年度は、特任講師を主軸に置いて、学生たちに英語を学ぶ楽しさと英語を身近に感じてもらえるためのイベントを企画し、その活発な広報活動を行うことができると思われる。

新企画として好評だったホームページの「学生が選んだオススメ教材！」シリーズも引き続き取り組み、単なるプログラムの広報にとどまらず、英語検定に挑戦する学生たちをサポートしていきたい。また、ホームページを見る学生の数をもさらに増やす工夫が必要であろう。さらに、新しいACEロゴは、ACEに対する関心と理解を深めるためにも、予算の範囲内で活用できる様々なシーンを考え、さらに工夫していきたい。

VIII. ACE PROGRAM

Siewkee Beh · Myles Grogan · 荒川亜希

2018年度以来、ACE PROGRAMの主要企画はACE特任講師によるLunch time英会話とACE LESSONであった。本年度は特任ネイティブ講師の不在により、これら企画の実施が困難であったが、センター教員や非常勤ネイティブ講師を最大限に活用し、積極的に学生の英語学習を支援した。

1. 例年のイベント

本年度は国際交流室と共催で「Halloween Event 2022」及び「Winter Event 2022」を開催した。両イベントとも学生が集まりやすい志学館1階を中心に行い、英語ゲームやクイズを通して、英語の楽しさを感じてもらうことができたと考えている。今後も、学生の英語学習のモチベーションに繋がることを狙っていきたい。

図1. Halloween Event 2022



図2. Winter Event 2022



「Winter Event 2022」で実施したフォトコンテストでは、「Winter」をテーマとした写真を tani-WA に投稿してもらうなど、英語学習と関係の薄いアクティビティであったが、コンテストを通じて、広く ACE を認知することができた（表 1 参照）。

表 1. フォトコンテストの応募者数

学部	学科・専攻	人数
文学部	日本語日本文学科	0名
	歴史文化学科	4名
教育学部	教育学科	10名
人間社会学部	人間社会学科	3名
	スポーツ健康学科	2名
薬学部	薬学科	5名
合計		24名

2. Lunch Time 英会話及び Extension Session の実施

英語に触れるチャンスを増やすために、Lunch Time 英会話を週 2 回、定期的に行った。前期と後期それぞれを、非常勤講師の Philip Bailey 先生及び Terence Lancashire 先生に担当していただき、English Café では様々な学部の学生と楽しく英会話をする様子が見られた（図 3 参照）。また、Lunch Time 英会話の実施状況は図 4 及び図 5 の通りである。

図 3. English Café の様子（左：Philip Bailey 先生、右：Terence Lancashire 先生）



図 4. 前期 Lunch Time 英会話の回数・利用者数（前期）

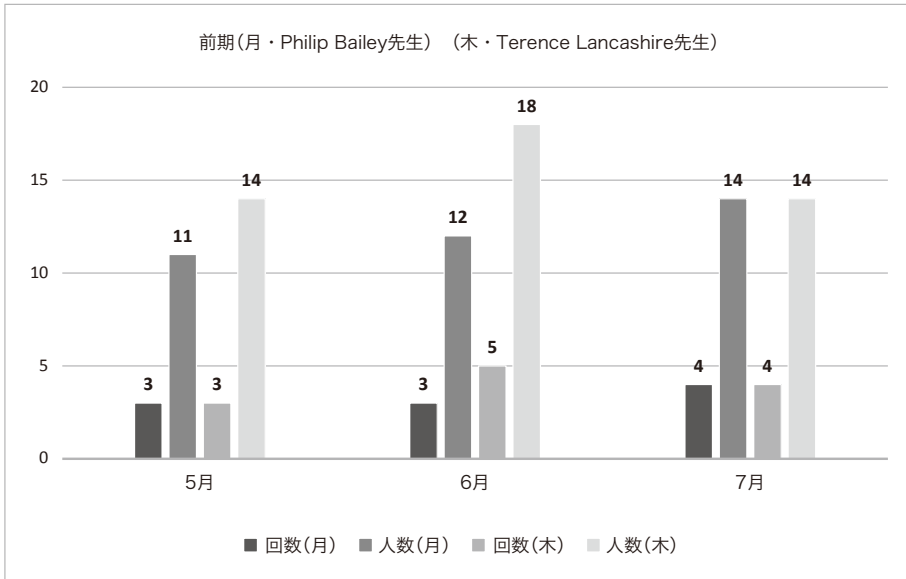
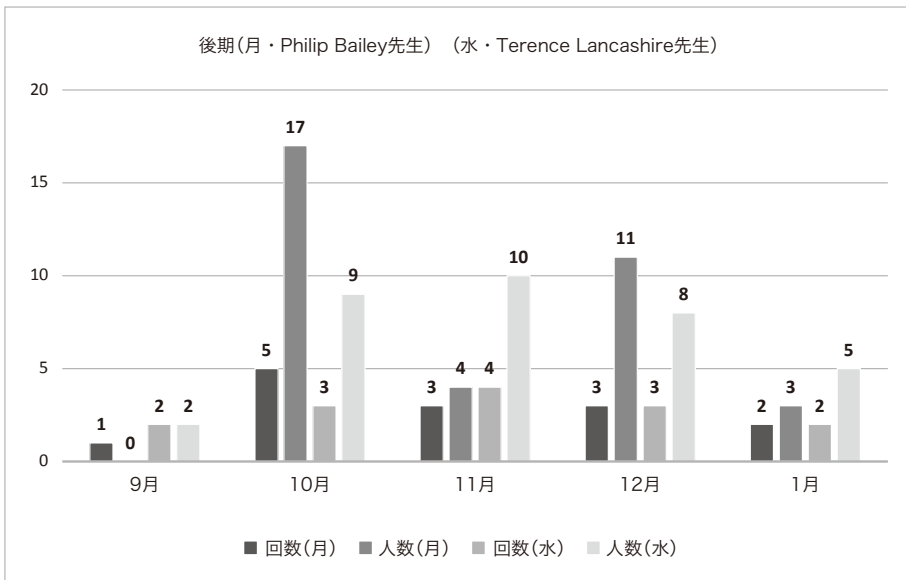


図 5. 後期 Lunch Time 英会話の回数・利用者数



全学部学生を対象に広く実施している Lunch Time 英会話とは異なり、本年度は個人のニーズに合わせた Extension Session を企画し、Terence Lancashire 先生に担当していただいた（図 6 参照）。学生からの主な要望は英検（実用英語技能検定）・TOEIC®対策や教員採用試験の英会話実技及び面接などで、完全予約制で実施した。

図 6. Extension Session の様子



3. 今後に向けて

ネイティブ特任講師は不在であったが、本年度も ACE は継続して学生の英語学習の支援に力をいれた。来年度は新しい特任ネイティブ講師が着任する予定である。新しい講師による ACE PROGRAM でも、より充実した英語学習支援できるようなプログラムを検討していきたい。

執筆者一覧

Beh Siewkee	教育学部 教育学科 講師
Myles Grogan	人間社会学部 人間社会学科 准教授
荒川 亜希	英語教育センター 職員
池田 香代	人間社会学部 スポーツ健康学科 講師
小山 敏子	教育学部 教育学科 教授
鈴木 幸平	教育学部 教育学科 准教授
森本 正太郎	薬学部 薬学科 教授
四重田 陽美	文学部 日本語日本文学科 教授

(五十音順)

ACE REVIEW 2022

2023 年（令和 5 年）3 月 31 日発行

編集発行 大阪大谷大学 英語教育センター（ACE）
〒584-8540 大阪府富田林市錦織北 3 丁目 11-1
TEL (0721)24-0596

印 刷 協和印刷株式会社
〒615-0052 京都市右京区西院清水町 13
TEL (075)312-4010

A digital version of this publication is available for download at
www.osaka-ohtani.ac.jp/facilities/ace/review.html

IN THIS ISSUE

➤ 教務関連

- 共通教育科目のカリキュラム改革をうけて
- 英語習熟度測定テスト

➤ 学習支援

- e-Learningプログラム関連
- 英語検定試験
- ACE事務室

➤ その他の事業

- 英語入試作問
- 広報活動
- ACE Program

Email: eikyou-center@osaka-ohtani.ac.jp

Tel: 0721-24-0596

HP: <https://www.osaka-ohtani.ac.jp/facilities/ace/>